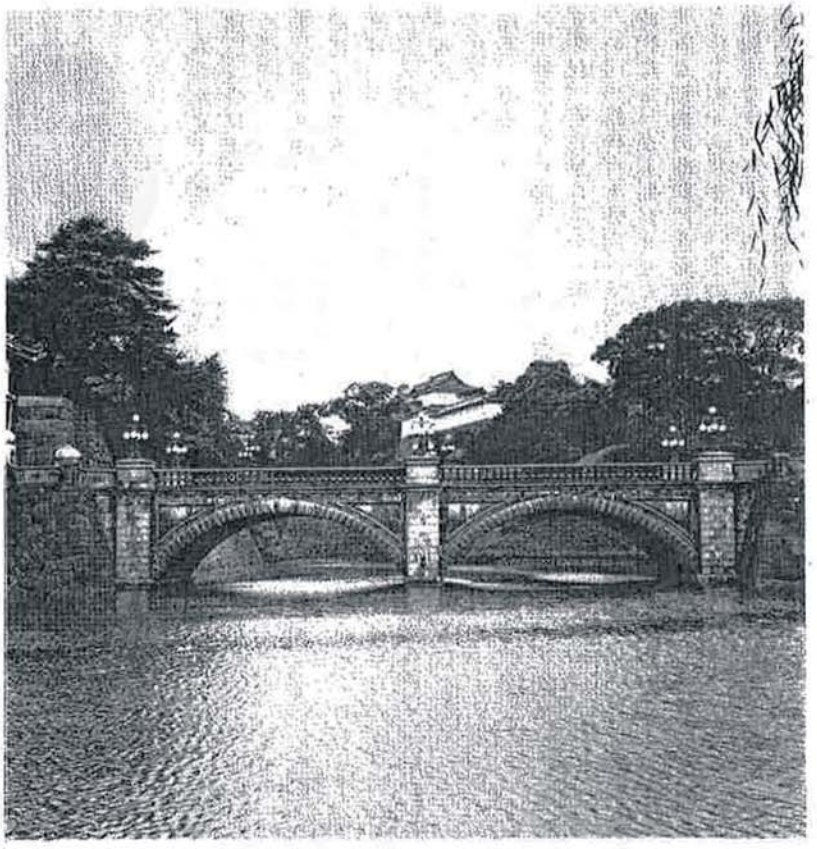


会報 むすび

第 7 号
・発行所
栃木県神社庁内
青年神職むすび会
編集委員会
・発行人
黒川正邦
・印刷所
下野印刷株式会社
昭和53年4月8日発行

奉祝 天皇陛下 喜寿

天皇陛下にはこの四月二十九日の御誕生日に
御歳満七十七歳の喜寿をお迎えあそばされる。

目次

友情と団結の輪を……一
庁長挨拶……三
若さ……四
十五年のあゆみ……三～八
十五周年を祝う……七
骨随炎叙曲……八
創立十五周年を祝う……九
青年神職むすび会諸君に寄す……十
十五周年を祝す……十
十年一昔……十一
昭和五十二年度活動状況……十一
十五周年の思いとその行方……十二
むすび会発足の準備……十三
行く川の流れに……十三
我ら青年神職……十四
むすび会と共に……十五
兼職の神主……十六
雑感「兼務神社体制のこと」……十七
夜明け前の人—竹内彌平次—……十八
民俗探訪レポート「日光女馬方物語」……十九
変身「むすび会」……二十
大木と盆栽……二十一
今、青年神職が置かれている現状は……二十二
むすび会設立十五周年を迎えて……二十三
若人と神社参拝に思う……二十三
神青協「沖縄祖国復帰五周年記念奉告祭
並びに戦没者慰霊祭に参加して……二十四
民主主義教育の副作用……二十四
「不滅」……二十五
『C・G・ユングの世界』……二十六
青年の道—二十年への提言—……二十七
編集後記……二十八

友情と団結の輪を

栃木県青年神職むすび会会長　黒　川　正　邦

本会創立十五周年の記念すべき年に当り先輩諸氏、会員諸兄と共に感激を新らたにし、今後の活躍をお誓いすべく御挨拶申し上げます。栃木県青年神職むすび会が創立された当時は本県神社界も戦後の混迷からようやく立直り前途に光明を見出した頃と聞いております。しかしながら当時の先輩青年神職等にはまだまだローカル線の汽車がにぶい汽笛をあげてゴトゴト走っていると感じられていたようです。そうした焦躁感、将来を思う真直な青年の心情が会の発足の原動力となり幾多の労苦と困難をのりこえ創立され、それから早十五年。

いつの時代にも時局の重大さが叫けばれない時代はないかも知れませんが、今まさに社会は大きな転換の時期に直面しており予断をゆるさないものがあります。この時期に私等青年神職は何をなすべきか、もう一度創立の原点にたち返って考えてみる必要があるのではないでしょうか。本会は初代横瀬会長以来、常に青少年の健全育成に真剣に取り組んでまいりましたが、この青少年対策活動も最も重要なものの一つです。現在栃木県には十三の単位氏子青年会が結成され活動しておりますがこの氏子青年会育成も先輩たちが神社庁教化部と表裏一体となって活躍し残してくれた大きな足跡であります。そして又これも創立以来続けて行なわれているものに精薄児施設とちの実学園の慰問と神棚祭奉仕があります。特に五年前の十周年記念においては吉田三代目会長のもとに会員一致協力し、チャリティーショーを開催し当時で二五〇万円という大金を寄贈出来たことは皆様も記憶に新しいかと思います。これらは会の対外的活動の一部ではありますが本会活動の基として今後共是非続けて行かねばならないものと考えます。

次に会のあり方として重要なものは自己研鑽の場でなければならないということです。会の活動を通して正しく物を見られる目を養うことです。偏向的報道は現在目にあまるほど日日の紙面をうずめていることは皆さんの御承知の通りです。その報道を通じてまるのままのみこむだけでなく、何故なのだろう、どうしてなのか、という疑問から真のものを見いだす正しく見る目を養なわなければなりません。時には仲間同志の激烈な議論も良いでしょう。そして時には酒をくみ交しながらの懇談もよいでしょう。会員相互が切磋琢磨し合い友情と団結の輪を広げて斯界の尖兵として活動するのだと言う自覚作りの場とすることです。こういったことは機会あるたびにくり返しくり返し言われて来たことかも知れませんが十五年という区切りの年に、もう一度考えてみることも意義あることと思います。

今革命的極左勢力は天皇制とその護持を第一とする神社界を当面の敵として攻撃目標に上げております。昨年来の各神社の放火事件神社本庁爆破事件さらには明治神宮爆破未遂事件等々、もう神道人は対岸の火事とのんびりしている時期ではなくなっていると言うことは明白です。こうした動乱の時期には青年の力こそ必要です。天皇を中心として守り来たった祖国の美しい歴史と伝統を護持するという役割は全神道人に課せられた責務ではありますが、とりわけ情熱と行動力に富む我々青年にこそ望まれています。今こそ私たちはその会員各自の奉務神社を中心に友情と団結の輪を地域社会の青年たちにまで広げ革命勢力と対決して行こうではありませんか。神社の杜に青年の力を結集しようではありませんか。

（宇都宮二荒山神社権禰宜）

大和国古社めぐり　橿　原　神　宮

挨拶

栃木県神社庁庁長　額賀大興

今の日本の中で戦中戦後の苦難の時代を知っている人口が段々少なくなって、戦後の教育を受けた人、戦後生れの三十二才以下の人口比重が大きくなり、そうゆう面では戦後は将に終った観がある。この人口比重は何も日本に限ったことではなく世界のいずれの国々でも同様であり歳月の流れの当然の帰結でもある。然し唯我々が考えなくてはならないことは日本は曾てない敗戦の悲惨さ、殊にポツダム宣言受諾の汚名を味い、如何なる戦力も持たず外国に防衛を依存する有様で、それでいて資源のない経済大国となり、経済戦争と云う形の変った友好国同志の摩擦の問題を抱えて内憂外患変動の激しい困難な局面に直面している。

私共神社界にとって緊急の課題は、皇室の尊厳を守り、一世一元制の法制化は恐れ多い話であるが御即位の大礼と大嘗祭と云う国の大儀と繋がり、靖国問題と合せて何としても立法化して貰はねばならない問題である。国の歴史を正しく位承する教育を正し、個人の家系やそれぞれの家に内在する美しい伝統と精神的物質的立派な遺産を円満に相続すると云う日本古来の美風が失はれて戦後の占領下に作られた憲法がそのまま改正されることなく続く現憲法に幾多の差障りが生じ、問題化して来た。今日本の美風伝統が根底から覆がえり崩壊しつつある姿は私共をせつに憂慮させている。

一部の国々しか見聞して居らないが外の国は夫々自国の伝統文化を非常に大切にしている。殊に新旧キリスト教国に於いては国教とも云うべき宗教信仰を持って道徳心を維持し、政治の土壌としているのを見ると、勝者と敗者の国情がこんなに違うのかと思う。とにかく、米・ソ・中と云う相反する軍事大国に狭まって日本は大変なさ中にあると痛感する。

かく考えるとき我々は今日の青少年に附託しなければならないことは議論の如何に拘らず論を俟たない。今の世では、斯界の将来は、青年神職は云うも更なり、これから育って行く若者に期待をかけるより仕方がないのである。我栃木県は神社庁傘下の青年神職の中で真に国を憂い各神社の将来を憂いて同志が集って研鑽を積み友情を温める青年神職むすび会が誕生して十五年になる。当時私は東照宮が三百五十年祭記念事業推進の最中という大事なときであり、その重責を担っていて、その一社の事情が折角神社庁の幹部から庁長就任を要請されながら進んで引受ける立場になれなかったことを覚えている。

唯東照宮の職員である荒川君が中心となり横瀬君を始め県内青年神職が忙しい中の余暇をさいて、自分達のこと、神社界のことなど同志と

十五年の歩み

―歴代会長のプロヒールとその活動―

初代　横瀬勝寿会長

戦後の復興の中にあり、本県神社界の将来を憂い青年神職の気概を結集し、同志を集めて、三十六年夏頃より幾多の会合を持ち、晴れて三十七年三月四日神社庁舎二階大会議室において東京都国民教育課長山口喬蔵先生の記念講演をも戴いて発会式を見事挙行された初代会長である。

質実剛健をモットーに学生時代からならした柔道の業は今でも氏子青少年の指導にもあたられ、今度五段の栄誉を受けられた。国体護持論者で定評のある横瀬さんは早くから教化部長、協議員・神政連行動隊々長等重職を歴任され、青年神職の日頃の目標的存在として活躍されている。又後輩の面倒見は良く、今でも若い連中と飲食し最後までつき合って来れる頼り甲斐のある先輩である。

賀蘇山神社禰宜

発会式記念写真

語らい実行に移す糧としようと「むすび会」と言う組織を作る話を聞いて至極結構であると返事をして置いた。

石原庁長時代、野球のチームを作って、庁長がユニホームを寄贈した。そして栃木県が中心となって関東大会を開催し中村屋で関東の指導者と懇親の会を開いた。副庁長であった私も同席して若き熱球の飛び交う県営の総合グランドに於て観戦し青い空気を吸って心がはずんだ。

中村屋の祝宴のうまかったことを覚えている。

今年は組織発会してもう十五年になると云う。

むすび会もその性格が神社庁傘下の外廓団体として神社庁神社界の直接の力となった今、出来る限りの後援も惜しまないつもりであることを承知して貰い精々実行力のある勉強と友情を交す場にし、将来の青年神職に受継ぎ裨益するところ多大なることを念じて御挨拶とします。

（日光東照宮宮司）

若さ

栃木県神社庁副庁長　柳田耕平

若い頃年輩者から昔話を聞くことが好きであった。然し一度は学識経験者の体験談は貴重で傾聴に価するが、三度四度と同じ話を聞かされると又かと云うことで聴く耳を持たなくなる。ところが今この年になってみると私もその学識経験者の類になったのか、その話は何度も聞いた。と一笑にふされることが多くなった。回顧や反省も同じだ。尤も経験と云うものは自分の身についたもので創作でないから幾度話を繰り返しても同じ話になるのが当然である。よく調停で甲乙両者の話を聞くとき相手の悪いところ許り一方的に申立てて初めは全く反対の立場で調停の隙がない。調停の場合甲乙夫々作戦を練って来るから創作の部分がかなりある。何度も繰り返し聞くうちに段々致命的な核とか障害とか相反するものが狭間って来る。

学生時代今皇学館大学々長である佐藤通次先生から「花小金井の国民精神錬成道場で三週間のそれはひどい禊と農作業と精神講話の連続で皮膚が骨にくっつくような栄養失調状態の中で」聞く哲学と云う授業を三日間受けたことがある。成る程聞いているうちに相手の人生観なり世界観なり或は国家観なりが分る。戦後調停や社会福祉或は神道教化の面でカウンセリングの仕事が多くなって私は地元真岡でその方面での奉仕が多いが、先ず相手の身になることである。苦情や心配ごと、その他の悩みも一生懸命聞いてやるだけで半分は解決する。あとは双方の努力と協調の精神を引出す手腕がこちらにあるかないかである。

私も晩学であったが神職となって三十五年。神社界の苦情係みたいな役を三十五年近く務めて、いつの間にか還暦を過して了った。

回顧すると、あれやこれや綾なし、糸をたぐ

第二代　荒川本一会長

本会の生みの親であり、横瀬初代会長とは車の両輪の如くその行動力と実践力には定評があった。特に少数精鋭主義の下に会員の親睦はもちろんのこと主に対外的活動に重きを成し本会の運営に当たった。精薄児童収容施設への慰問、刑務所大祓式、氏青との交歓野球大会の開催等今日以上に巾広い教化活動の実践に感嘆するのである。県内の神職子弟を対象にした神職子弟講習会には当時中学生であった私（柳田）も参加を致し、東照宮社務所に於ける小中高生の仲間との合宿で親しみを感じ神主になることへの抵抗をいくぶんでも和らげられた事を思い出す。

惜しいことに郷土の本兼務社の氏子合同結社作りのさ中、基盤が出来これからという去る昭和四十五年一月二十六日不慮の事故で突然逝去された。

無類の世話好きで人情家である荒川さんの青年神職の先頭に立ち行動している姿はいつまでも語り継がれることであろう。今でも存命であったら、本県神社界はさらに発展飛躍したであろうと言われている。

―住吉神社宮司―

り機にかけて、いざ織ろうとしても糸がはじけてぶつ〳〵な生地になってしまう。元々私は割算人生で生きよう、簡単、単純、率直と云うのが性格ですから哲学することは苦手である。扨て是の世界大戦が我に利あらず、而も無條件降伏と云う未曾有の悲劇で終ったことは何としても神社神道に致命的な打撃であった。あの苛酷なまでの神道指令が独立して二十五年にもなった今は新憲法の災と重なり神社界が希望している伝統ある美しい諸制度が復活出来ないでいる。

何時の時代にも変化の時には青年の力が原動力となる。

戦後青年神職の会が全国的に生れ廃墟の中から伝統を護持しながら新しい神社に変貌して再起した蔭に当時の青年神職の力が預って大きい。

本庁ではその力を集めて組織し神道青年会と称して外郭団体としたが或る面では系統の範囲にあるが或る面では範囲外にある場合が多い。

とちの実学園慰問

栃木県でも神社庁とつかず離れずの青年神職の集いがかなり長く続き一時青年神職がと云うより同志的青年神職が中絶して了った。それは五十九回式年遷宮が成ってほっとした平和な間隙だった。

終戦時神職であることが恐しく、恥かしくて辞めて神社を捨てた輩も相当あったことと思い合せるとき信念の尊さは経済の埒外である。

かっての官国幣社と民社とみにくい人事等の面での意見の違いが今尚三十年も経って後遺症となり県内統一の出来ない県もある。幸い栃木県は立派に統一が出来て今にして何よりである。

若輩の私に芳賀支部長を指名したのは芳賀の元老中里彦九郎、阿久津喜徳、大坪新一郎三大人と病弱の私の父の後盾であった。複雑な戦後処理を開始したのは追放されて間もない昭和二十一年七月であった。宗教法人令の登記から始めたのだから感概無量である。

昭和二十二年正月の理事監事会のことである二荒山神社臼嶺閣に於て突然高橋庁長から神社庁舎敷地一括処分案が出され、始めて出席した会議に断固絶対反対したのがそもそも神社庁に深入りして了った要因の一となった。

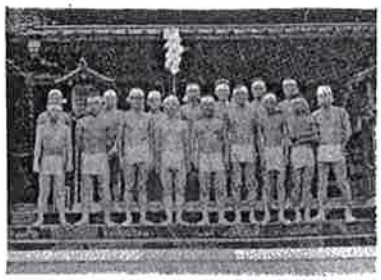
幸か不幸かその時は安佐の宮田、足利の小野寺那須の長倉、塩谷の一條さんなど先輩の長老が又、半端賛成していた方々が同調し、再考することで沙汰止みになり、その儘原案が撤回になった。結局今度の三十周年記念事業に大きく役立ったことを思えば、あの敷地は無くなる運命にあったのかも知れない。

神社庁が暫らく日光二荒山神社に置かれた為庁長は居ながらで便利であったかも知れないが

第三代　吉田健彦会長

横瀬、荒川両会長の後を受け、十周年を迎えた第三代目の会長である。県内巾広い会員の入会を促し、会員相互の協力の下十周年記念事業を見事成功させた。メイン事業として、昭和四十六年六月八日栃木県体育館に於いて〝恵まれない子に愛の手を！〟と題し慈善チャリティーショーを企画した。藤村有弘司会の下ダークダックス、ナンセンストリオ等の出演の催しには、神社庁を始め、神社総代連合会、下野新聞社、栃木県社会福祉協議会、栃木県共同募金会の皆様の後援を賜わり、一千有余名の参加者の拍手は本県神社庁始まって以来の本行事に対するあたたかいご声援と感謝をした次第でありました。むすび会の二十周年に向けての皆様方のあの激励の拍手は会員の耳に今でも響いて来るようです。飾り気のない親しまれる人柄がチャリティショウの成功の一因となったことは言うまでもありません。

（日光二荒山神社権禰宜）



於　古峰神社

当時不便な日光まで会議に出席する役員は大変だったようです。その上何時も高橋庁長さんが二荒山の犠牲によって県内神社の為に執務しているのだからと圧制的に恩をきせられて僻易しながら平身低頭していた役員会の姿に反発を禁じ得なかった。県都宇都宮に移転の一日も早からんことを主張して随分高橋庁長さんには盾つき申訳なかったと思っている。

あの頃全国の情報が割合流れて来て、栃木県に赴任した祭務官、祭務官補は立派で適任者であったが神宮の神官神職の転出など全国的には色々と話題を播いたようで本庁設立時のどさくさ人事に反撥があったことを覚えている。

もう一つの原因は社格廃止に伴う民主化のゼスチュアにもあった。日本共産党の徳田球一氏が日本に帰って割れるような拍手の中で英雄的帰還の歓迎を受けた時であった。一方では神道指令に続いて集中排除法や農地解放財産税による実質上の財産没収、教育改革等剰之衣食住の貧困など終戦時には権力者を排除しようとする風潮が日本全土に覆い被った時代である。

民社の中堅クラスの神社の若手から青年神職の自覚と運動が起ったのも当然と云えば当然であった。

栃木県は別に中央の指導によった訳ではないが情報は流れて来たし内に本庁、神社庁の欠点を正して充実させ、外に神職指導の神社の復興と神道精神の不動なる作興を計り、その為には云わず語らず若い連中が集って今後の活力を養う意味で時々集っている中に青年神職会が生れその布令元を私にやれと云うことで約十年間不文律の会を持った。会費はその都度自腹でした。今その方々は既に六十を越しそれぞれ重責を果して息子の代にならうとしているし別表神社のメンバーでは権宮司を始めとして活躍中である。そして間もなく次代の若手に喜んでバトンタッチが出来るよう念願しているものと思う。私は一年があっと云う間に過ぎてこんなに十年が短かいものかと最近つくづく思うことがある。「悔のない生涯」と努力したつもりが案外悔が多過ぎる生涯になるような気がする。悔を残さないのには挙げて後嗣者次第である。十五、六年前荒川本一君から内々の話があり神社庁とは直接関係なく独自な組織で青年むすび会を組織して発足するとのこと、暖かく見守って後援して貰いたいとのことでした。勿論双手を挙げて賛成した。

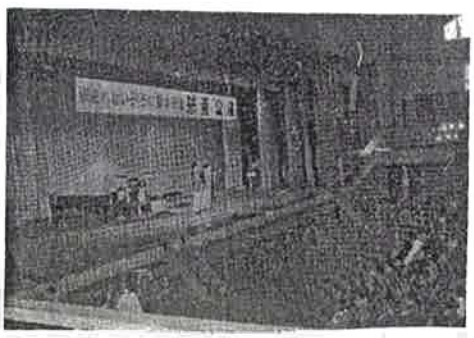
だんだん神社庁が発展的に事業を起し活動をするに当り直接むすび会の若い力を必要とする時機になり各県のように神道青年会的性格にむすび会が歩み寄り神社庁の予算の中に入りつかず離れずの活動と懇親を重ねて欲しい。勇み足は若者の特権である。引退したOBは口ばしを入れずに遠くから見守って成長を補けて欲しい。

日本は今内憂外患入り乱れて大変な時代である。次代を担う青年が何ぼ働いても、活動しても、これで沢山と云うことはない。神職の活動にはそれ程際限がないのである。

今度栃木県青年神職むすび会が発会十五周年記念特集号を上梓するに当り乞に応じ当りばったり乱筆して投稿するに文脈絡整はず仮名づかいも正さず書き殴った粗雑を詫びたい。

各位もどうぞ健康第一にやがて同志後輩から慕われる先輩になり得るよう自重自愛精々頑張ってむすび会共々発展されるよう希望し、回顧の一、二を附して御挨拶とします。

（大前神社宮司）



むすび会十周年記念チャリティーショー

「十五周年を祝う」

栃木県神社庁副長　神山　衛

昭和五十三年戊年早春栃木県青年神職むすび会が結成を見て以来、早や十五周年を迎えられ誠にご同慶に堪えません。

顧みれば神社は戦後、国家管理を離れ宗教法人令に基く法人神社としての歩みに幾多の苦難の路を辿りて現在迄三十有余年御神威御神徳の発揚そして惟神の精神を説き乍ら、個々神社の維持運営に努力を重ねて参りました事は今さら乍ら申すまでもありません。

この様にして神社本庁も共に県神社庁も五年十年と設立記念式典を以て意義あらしめ、且つ神社庁の永遠の基礎を築く可き記念事業を実施し来り、特に設立十五周年記念事業として戦後初めて神社の基盤を記録し、以って沿革を明らかにし、御祭事は勿論特殊神事外の豊富なる内容の許に栃木県神社誌の編纂に力を注ぎ広く記念刊行せし事は誠に意義を高めたる事である。

この直後頃より栃木県青年神職中の同志的会合を以って神社の将来を考慮され、若さと情熱を以って斯道の使命達成の時宜に志を同じうして度々の会合に各々討論を繰り返し青年部の結成を試みたるにより一般神職の為に一部の反駁もみられたる事は否めない事実としておぼろげ乍ら記憶するところです。

当「栃木県青年神職むすび会」の名称の許発足されて初代会長から現会長まで、会の名の通り「結び会」として十五年間栃木県神社庁傘下として不離一体の存在として、その間重要なる役割を果して来ている事は設立以来の幹部諸氏は勿論現会員諸氏のご苦労に感謝せざるを得ません。

今後は尚一層の会の運営に当りましては後継青年神職の育成と氏青との関連性を密にして現社会に於ける青少年の非行問題を含めて浄化に猶一層の奮起を期待してやみません。

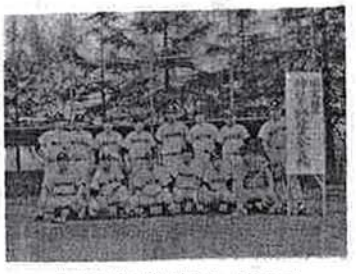
（神明宮宮司）

栃木県神社庁紅白野球大会

第四代　提箸克之会長

本会の二十年へ向けての歩み方を会員と共に考えた形式ばらない、つき合いの良い思いやりのある会長である。新会員の発掘と積極的な参加を促し、会員相互の連帯意識の高揚を目ざし若手会員の活動の場を関東地区から全国へと広げた。関東地区野球大会の発祥県である本県に於いて真夏の県営球場下熱戦が繰り広げられ、本県チームは惜しくも準優勝であった。大会終了後鬼怒川温泉で懇親会が開かれ関東地区の青年神職同志の親睦を深めた。その輪は十二月に三十名参加の東京神青との親善ゴルフ大会をもひき起し、尚一層友情を強めた。又京都での全国氏子青年創立十周年記念大会には会長他吉田前会長らが表彰を受けた。当大会に先だち行なわれた神宮新殿御造営工事に伴う「お白石持ち行事」には会長以下十名が白装束の姿で御正殿近くまでの御奉仕が叶えられ二十年の門出に相応しい年でありました。

（日光二荒山神社権禰宜）



宇都宮県営グランドにて

骨髄炎叙曲

宇都宮二荒山神社宮司　西田重一

話は少し古くなりすぎるが、明治三十年代から三十二年代にかけて、早稲田大学の教師に、綱島梁川と云う秀才の青年哲学者のクリスチャン教師が居た。

この人の全集が、大正十二年に春秋社から刊行されて、その第一巻と第二巻が東西倫理学史であったので、国大の道義科を志した私は参考書として、その全集を購入し、大いに啓蒙されたことと、不思議なことに、発行担当者の一人に加藤一夫と云う人が居り、私の住居が、加藤一雄と云う親戚の家であった為に、配達が混線したので、特に印象を深くし、学生時代の大部分の古本は、卒業後、転々として居を変えて居る間に売りとばして居るのだが、爾来約五十年私の大事な参考書の一つとして運命を共にし、現在も尚、書架の一隅に保存されている。

話はとぶが、前記の加藤一雄氏は、荊妻の従兄で、現在、八十余歳で尚健在、全国私立大学共済組合の理事長をつとめて居るので、よくよく因縁の深い書籍でもあったし、それに、明治中期の日本の西洋思想の啓蒙学者がクリスチャンに多く、この梁川全集の大部分がヤソ的で、彼が肺を疾って病床に居る間に書いたものに、病人と信仰のものが多いので、青年のセンチメンタルを捉えた所があるせいでもあっただろうし、又、その反面に、彼が故郷の岡山県笠岡在から志を立てて上京の途中、農村の秋の祭礼の神輿渡御を見て、野蛮の風習と評して居た所が妙に私の頭脳に喰い込んで今日も尚忘れかね、明治時代の所謂日本のインテリ欧米かぶれの視界の狭さを理解する有力な資料として記憶に残って居るなどのことが、古本に売りとばさせない未練の一端になって居ると思う。

元来、信仰と病気とは非常に密接な関連性のあるもので、他にも、私の親戚に母親が肺を患って、深いヤソ信仰になり、子供等数人を全受洗させた実例もあるし、今、老境に足を突込んで、まことに始末に了えない現在の骨髄の疾患の苦悩と、神主と云う職業との信仰のヂレンマの朝夕の心理状態は表現の方法が発見出来ない。

尤もこんなことが言える気持の余裕は、生命に直接の不安がないせいかも知れない。

病気の実情は、戦争中、支那で頭部に負傷したが、幸か不幸か前額部の帽子を通して表の殻に軽いひびが入った程度で、中国の北京大学の医師も、之は生れつきではないかと軽くあしらって居た程で、負傷当時は臭血も出るし、寸時意識も不明に陥ったと思うが、身辺の華人の親切で、起き上り、車を拾って帰宅し、加害者の職業人名等も手帳に記入して、翌日早速、警備機関（同県出身の国体主義信仰者の少将山口三郎氏）が職権でその八方を探索させて下さった

第五代　黒川正邦会長

提箸前会長の若手育成起用の意向の下に、弱冠二十七歳の黒川新会長が昭和四十九年六月就任した。青年神職むすび会の名称に相応しい青年会長である。先輩を立て、後輩を思う心やさしい力持ちの日本男児の会長でもある。

まず、対内的には会員各自の使命感の向上を目ざし、会のあり方の研究や祭式講習会の開催等、対外的にはお宮の縁を守る運動を展開すべく「鎮守の森は心のふるさと、お宮の縁を育てよう」のスローガンの下に、県内の町中の神社に植樹奉仕を続けて四年になります。

さて今般十五周年を迎えるに当り、会のあり方が検討され十五周年を期に神青協正式加入が昨年八月臨時総会に於いて決議され決着をみた。又記念事業として九月九、十、十一日二泊三日の日程で『大和古社巡り』参拝団が菊地幸作県神社総代連合会長外県内各地の氏子総代さん達五十四名の参加を得て行なわれた。吉野神宮、橿原神宮、淡山神社、大神神社、春日大社各社の正式参拝を始め崇神天皇御陵のお参りをし、吉野の山々を旅する中に古を偲び、夜の宴では総代の皆様から激励されて夜遅くまで共に飲み明かしました。不十分な企画にもかかわらず、また次の機会を設けるようにとの申し出に会員は皆心配の甲斐あったと安心した次第であります。その後恒例の行事を行い今四月八日の十五周年記念祝賀会に向け準備を進めている次第であります。

（宇都宮二荒山神社権禰宜）

が、地下にもぐったか何かで、遂にその人物は見附からず、北京国立病院に一ヶ月ばかり、化膿を防ぐと云った手当で、日常の仕事には大した影響も感じないので、気にはなりつつも、時局の方が大事なので、ばた〳〵するだけで推移して行った。酒も結構飲めたものだが、家族は大部心配して居た様だ。

当座の自覚症状と云えば、右の目と左の目のピントがうまく合わないことがあったが、これとても、大して気になる程でもなかった。その内に、戦果はいよ〳〵不利になり、祖国の運命を思うと、目玉が片一方ふっとんで居たとしても悲しむ気持にはなれなかった程、気は張りつめて居た。

そうこうする間に、責任者の吉田茂（皇典講究所華北総署々長）先生―元厚生大臣、皇典講究所常任理事、福岡県知事、九州ブロック議長―から「一応帰国あれ」との電報が来た。恰度その頃隣家に北京駅の助役（京都大学法科卒）の桂さんが居たので当方が思案して居る間に、乗車や家財の手配をすっかりして下されて、足手まどいの婦女子老人等と共に畳敷の座敷特設車に乗せられ、釜山迄強制送還。時に昭和十九年十二月十五日。

それから再度の神主生活復活が決定、昭和二十年三月廿三日、避難民の群にもみくちゃにされ、上野駅出発、秋田の古四王神社に向かった。

神様の思召のまま〳〵妙ちきりんな二ヶ年をドブロクやトンチンカンの頭の地方役人等とすごし、再び東京の焼野原の生活が始まった。

（元皇典講究所華北総署主事）

創立十五周年を祝う

日光二荒山神社宮司　喜田川　清香

本会は、斯道を思う若き情熱と力を尽して、神道の興隆、国民精神の昂揚に力強く役立とうと、決意も強く発会してから今年で十五年を迎えた。

創立の目的に副う諸君の研鑽と、苦労多かった活動努力を称え、年を追っての躍進に深甚の敬意を表します。

神社庁の進展隆昌は、本会の協力活動に負うところ誠に大きいものがある。神社庁の教化対策に新らしい気吹を入れて、講習会、研修会をはじめ諸行事に、また神道政治連盟の行動隊活動に、氏子青年会の結成・育成指導等々に、情熱を注いで協力活動を続けて来た会員の研鑽努力は、神社庁にとってなくてならぬ存在となった。

我国二千年の歴史と伝統に育まれた日本人本来の優れた精神基盤を見失った戦後三十年の瑕痕は、今なお国論の不統一、教育界の混迷、道義の低下甚しく、義務を忘れたエゴの「物で栄えて心で滅ぶ」といわれた高度成長下の唯物安逸も、今では不況の嵐に打ちひしがれ、再出発の道を求めて右往左往している。

世相はまさに混迷の極にあり、今や致命傷となっている。このまゝ推移しては由々しいことである。一日も早く立直りを見るよう撓まぬ懸命の努力を傾けて行き度い。

日本人個有の精神的所産であり魂の原点、住民の精神的和合のまつりの場である神社に仕える吾々には、国体の顕現、思想善導教化の大きな使命を課せられている。

歴史伝統を守ることがこの国を守ることであり、お互の生活を守ることである。祖先の道を極め、工夫と努力を傾けて祖国を守り抜く決意と勇気を以て、偏向思想から本来の日本に立帰らす為の強い自覚と責任感を植付けるよう啓蒙して行く国民運動の中心者となって、良き環境づくりに頑張って貰い度い。

会員諸兄の愈々健勝を祈り、益々結束を密に本会活動の稔〳〵い成果を期待して已まない。

青年神職むすび会諸君に寄す

日光東照宮権宮司　矢島清文

いま、栃木県神社庁傘下の組織の中に、いわゆる神青協（神道青年全国協議会）の構成はない筈である。今日では、その全国組織の会議には栃木県では青年神職むすび会の代表が参加して役目を果していてくれるのだと思っているがどうだろうか。

既に三十年近い発展の道を歩いて来た全国神青協に、当時、栃木県が何故に歩調を一にしてその組織に加入しなかったかの理由は大きくわけて、二つあったと思う。

一つは、当時の神青協の見方考え方、目標、視野などが、私共栃木県の青年神職のもつ考え方に比べ、あまりにも性急すぎた感じで、素直に受け入れられなかったこと。

一つは、他県の例を見ると、神青協の若いエネルギー、行動力がともすれば感情的な人事問題に傾きやすく、本道を外れ勝ちの感があったかに思われたことであった。

東京での会議の若い気はいに圧倒されながら、いつも重い気持で帰って来て、青年神職の幹部を集めて報告すると、皆が私よりもっと心ひろく、巾ひろい考えでうけとめてくれたことは有難かったことを思い出す。そうして、その後は神青協の全国会議にはオブザーバー的な立場でおつき合をさせていただきながら、遂今日を迎えたというのが実情かと思います。

その加盟、未加盟の功罪はやがて歴史の判断が下る筈ですが、やがて、時が流れ、見るに見かねた思いで燃え上ったのが、横瀬さんや荒川さん達のむすび会であったことを思うと、自分なりに、沈潜の時期でよかったとも思い、空白の退職の時期であったかと、再び反省している。

ともあれ、むすび会はその提唱者が、自分達の時間で、自分達の力で、自分達の経済と経営で、えらい人に助成を仰がず、長いものに巻かれず、自主独立の精神をづっと守り続けて相当の成果をあげているのは称讃に値する。そして私共の時代と違って県内各地に有力分子が分散配置、夫々活躍していることもまことに頼もしい。

しっかりと大地に足をつけて、よく足を踏まえて壮大な希望、理想の実現を試みる行動力の発揮をこそ期待する。

十五周年を祝す

古峯神社宮司　石原敬士

この度は栃木県青年神職むすび会が創立以来十五周年を迎えられましたことは、誠に御同慶の至りです。

人生の中で青春とは最も生き生きと輝き、そして行動的・創造的であります。そうした時代に生きる会員諸氏は日本の国と、神社神道の歩むべき道を高い理想をもって進まねばなりません。経済・思想・教育等々どの問題を取り上げても満足できる社会状勢ではありません。そうした現代世相の雑多なマスコミや誤った世情に流されることなく現実の社会を透視し、対処してゆくにはますますの努力研讃が必要であるとともに、今こそ〝むすび会〟が本当の意味で世に問われなければならない時ではないでしょうか。

むすび会が、青年神職の親睦会になってしまうことなく、日本文化を守る尊い使命を持っていることを、いま一度認識し、十五年間の歴史ある先輩諸兄の切り開かれた道を、迷うことなく進まれまして、栃木県青年神職むすび会の弥益のご発展と、会員諸氏のご活躍をご祈念申し上げます。

十年一昔

栃木県神社庁教化部長　永澤瑞碩

栃木県青年神職むすび会が結成されて今年で十五年、十年一昔の単位で数えると、一昔半の会齢を重ねたことになる。発会当時会員の一人であった者にとっては、もうそんな長い年月が経ったのかと、感慨無量である。思えば設立準備当時、青年神職が集っては神社界を憂える姿は、時としては神社庁批判となった為、とかくの誤解等を生じたが、初代横瀬会長以下の意気と熱意により、神社庁当局の理解を得、組織結成をみた経過は、会報「むすび」十周年特集号に詳報してあるところである。以来任意の組織として、神社神道興隆の為、県内青年神職が相寄り研讃を重ね、今日では神社庁の青年神職の組織として、欠くことの出来ない確固たる組織にまで成長しましたことは、歴代会長始め会員諸氏の情熱の然らしむるところであり、御同慶の至りであります。

神社界将来の明暗は一に青年神職の双肩にかゝっていることは言うまでもありません。いつの時代にも若さ程尊いものはないと云われる。時代感覚は、その時代に生きる若い人々の感覚であって、壮・老年の感覚は、歳を経た感覚のスクリンを通してのそれであって、も早若者の比ではない。情熱・行動力に於ても然りである。神職は神社を奉護することを使命とする。戦後三十余年の今日まで偏向的な思想状況下、神社のことを何も知らない世代の多くの人々を教化し、顔を向けさせ、手を合せさせることは並々ならぬことである。我々は眼に見えね神に向いつつ、みることが出来る神社を通じて具体的な宗教活動を起し、その活動を更に広めて、神社を中心とする人づくり、街づくり、国づくりを押しすすめ、神人和楽の理想を日本に顕現してゆかなければなりません。今こそ青年神職の結集と団結が最も緊要なときであります。十五年の歴史を持ち確固たる基礎の定まった「むすび会」は、全国神道青年協議会に加盟する傘下の団体であり、全国的な連りの中にあって、栃木県神社界の最も活動的な組織として、新らしい息吹を送り込んでもらいたい。若い会員各位の情熱・使命感・行動力を結集し、神社庁教化部と車の両輪の一方となり、神社奉護実践活動に邁進してもらいたい。

創立十五周年に当り祝意を表し、今後の発展と、たゆまぬ研鑽・巾広い活動を乞い願う次第であります。

（栃木県神社庁教化部長・日光東照宮権禰宜）

昭和五十二年度むすび会活動状況

三月　七日　編集会議、宇二荒山神社
（柳田、阿久、大金、横山）
四月　三十日　幹事会、宇二荒山神社
（会長以下　八名）
五月　十二日　五十三年度総会、宇二荒山神社
（三十名）
五月九～十三日　神青協「沖縄祖国復帰五周年記念奉告祭、並びに戦没者慰霊祭」奉仕　越口幹事参加
五月二十一日　佐野栃の実学園神棚祭奉仕
（会長以下、十二名）
五月二十七日　歴代会長との懇談会、宇二荒山
（六名、黒、柳、阿久、横瀬、吉田、提箸）
六月七～八日　一都七県神社庁親善野球大会
（埼玉、十六名）参加。
六月九～十日　神青協総会　於神社本庁
（会長、矢野、阿部、柳田）
六月　十六日　幹事会、宇二　古社巡り
（会長以下、十二名出席）
六月二十八日　神社の森をそだてる運動、植樹奉仕、報徳二宮神社・日光東照宮・安住神社・大前神社
八月　十二日　幹事会臨時総会（二十五名）
九月　一日　古社巡り最終打合せ会
九月九・十・十一日　大和古社巡り
九月二十一日　千葉神青協との懇親会
十二月　五日　役員会　宇二荒山神社（五十四名）
七日　関東地区会長会、本庁
二十一日　忘年会
二月　十八日　関東地区会長会、本庁
三月　六日　役員会、編集会議

十五周年の思いとその行方

初代会長　横瀬勝寿

大学を卒え神道専攻科にあったころ色々な人と接し飲み、語り、論じている間に、神主として生涯進むことの大切さ（世の中をみて）、その道をひたすら歩むことの尊さ、そして人の連帯と向上との重要性を教えられた。

この様なことを心に留めながら、故あって三十三年春日光二荒山神社に奉務することとなった。

多くの青年神職の方々と交り、心情も深まる中で、何時しか神道を語り合う様になって行った。故荒川本一君、永沢君、吉田君、宮原君、提箸君、田中君、二橋君、人見君等始め多くの諸兄と、時代の移り変りや斯界の将来など大見栄をきって、夜半まで激論に激論を重ね意気は統合し、愈々友を得て「青年神職むすび会」の発会をみるにいたった。（発会の経過については会報むすび三号に当時の資料の一端を載せてあります。又会報むすびの題字は永沢瑞碩君の筆によるものであります。）

「むすび」の名は「産霊」より出ております。何時も新しい思考の生命であってほしいと念じ、いくつかの案の中から選定されたものでありますけれども、その当時、会の性格に対して理解の不足であろうか、重ね〳〵困難な折もあったが、日一日と変り行く社会の中で、今後神社と神職は如何に生きぬかねばならないかとの基盤に立って、これらの困難を忍の一字に切りぬけて来ました。思えば当時の会員の苦脳と努力は使命感に燃えながらもなみ〳〵ならぬものがあった様に思います。

然しながら、一年二年たち、会は元庁長故石原重殷宮司さんの温情と励ましの言葉を胸に成長し、斯界の諸先輩宮司さん方にも心良く理解され、故荒川・吉田・提箸・黒川正邦会長と会員一体となって幾重もの荒波を乗り越え、十五年を経て来たことは喜びと感慨深いものがあります。

この様に、草創期は結束し、建設期は育成、思考し、展開期は胎動するかの様に十五年の歩みは足早に流れて参りました。本会のこれからは成熟期とでも云えましょう。

今や本会の基礎は微動なく固まり斯界に寄与することは何人も疑がう余地のない処であります。従って、その将来の責任は重く、且つ大なるものがあり、成熟期の会の基本は思考熟慮をようするやに思われます。

以下私考三点をあげ参考に資します。

一には会の性格の不変の点です。

本会は「産霊」より考えが出ているのでありますす故、常に周囲の風に押し流されることなく、独自の「思考の生命」を生みだす性格と、たゆまぬ努力をば拂わなければならないであろうと思われます。

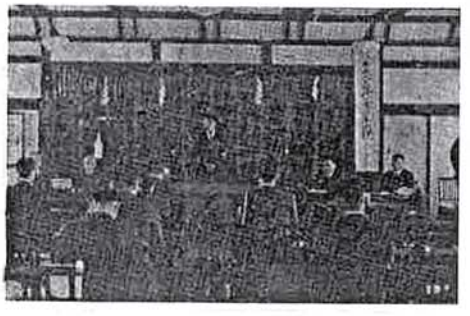
二には会員自ら人格の形成と連帯性を培うきびしさがなければならない点です。

十五年の歳月が早や流れ、草創期・建設期の人々が先輩諸賢の善きを取り、斯界に社会に一筋二筋と道を切り開きつゝあります。これらの道は本会会員が確信をもって歩むことの出来る道であろうと思います。然し、この道を歩み行くには人格の錬成と向上が一層望まれ、深い相互の信頼と連帯の絆の上に立って成せるものであります。

三には本県氏子青年会の育成の原動力とならねばならないと云う点です。

本県神社庁に於いては過去再々にわたって氏子青年会育成に努力を拂って参り、最近ようやくその芽ばえの様な兆が見えて来ました。然しながら、それは未だ充分ならず、その育成は急務であります。従って、県教化部と相まって本会の対社会的活動の場となさなければならないと信じます。発会の真の目的も内々この一点に構想は絞られていたことを思えば、実に長い年月の道程ではありましたが、このことは今や本会事業の中心であるべきと深く考えます。

以上、これらを遂行して参りますには会員の



発会式典（神社庁）

格別の努力にまたねばならないであろうが、豊かな会と繁栄の斯界を希求する輩なれば、記念する十五周年に当って愚言を提し、価値観の変遷はげしい中で会の運営に最善を期していただき、その将来の栄光を祈念するものであります。

むすび会発足の準備

（当時の書簡より）

第二代会長　故荒川本一会長

拝啓　晩秋の候、貴職には彌益々御清勝のことと大慶に存じます。

神社庁も設立十五周年を数えました。神社もまた、ローカル線の汽車のように、にぶい汽笛を吹きならして十五年――その生命を支えるものは、老人のロマンチズムのみ、勿論、ロマンチズムも神社信仰の大きな要素ではありますけれども、夕日の美しさに似て、滅びゆくものの美しさでしかなかったならば、これから、その道を歩んでゆこうとするものにとって、たまらない焦躁にかられることと思います。

この焦躁を発展的に打解するため、また合理主義にもとづく近代社会への積極的な挑戦の場として、若い神職が一人より二人、二人より三人相集い、相語り斯界の将来のために懇談研修するを目的として、左記趣旨のもとに栃木県青年神職会（仮称）の発足に際して貴君に御相談致したく

とき　十一月七日（火）午前十時

ところ　神社庁会議室

必ず御出席下さるよう御願い致します。

趣旨

現今の世状を鑑るに青年神職の活動は余りにも停滞的にして斯道発展の為に重大なる影響を及ぼさんとするは吾等の是とする処に非ず、然に将来に於ける斯道の昂揚を憂い、吾等青年神職が此処に立ち上り全国的組織の結成を成さんとするは早きに非ずして当然の責務なり。

ありし日の荒川さん（左）

然処、昨今同志賛同のもとに県青年神職、並その他賛同者の地方組織を築き当局の懇談研修を重ねつつ全国組織結成への第一歩を踏み出さんとするは誠に意義あるものにして将来に光明を投げるものと信ず。

依てかかる趣旨に御賛同賜り当会発足の為に絶大なる御高配をあおぐものなり。

昭和三十六年十月三十日

発起人

横瀬勝寿（佐野）
松田一郎（日光）
山田文明（宇都宮）
中島敏幸（鹿沼）
宮原　功（足利）
荒川本一（栃木）

殿

行く川の流れに

第三代会長　吉田健彦

最近の新聞に日本とアメリカの子供達がこの世の中で一番怖いものは何にかと云う調査報告が掲載されていた。それによると、日本の怖いものは、一番に母親、次に父親、先生、兄弟、友達で、アメリカでは、一番に近所の子供、次に父親、兄弟、悪魔の順で、日米の間では子供の母親に対するイメージに対照的な違いがあることが明らかにされている。

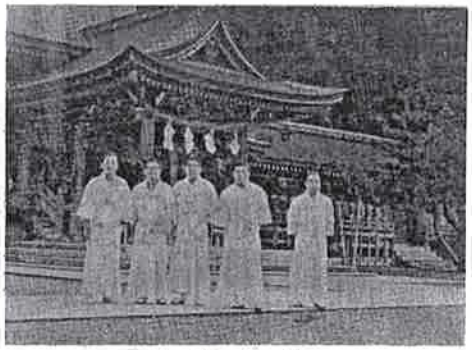
特に、その新聞の見出しに「日本、鬼ママ、パパ先生」と大きな活字が目に映った。一昔前の子供であれば、地震、雷、火事、親父の順と相場が定っていたものが、時の流れ、世の移り変りと共に、現代の子供の母親に対する意識は、

唯怖いものでしか映らなくなってしまっている。あのやさしさを感じさせる母親像は何処へ消え去ったのだろうか。

漫才の春日三球、照代ではないが、それを考えると恐ろしくて我々の方が夜も寝られなくなる。現在の母親が鬼ママであるなら、この母親が育った子供の頃の時は、どんな風であったろうか。子供に対して、入学、卒業、就職まで母親が同伴しなければ、心細い世代の人々ではなかったか。過保護時代と云われ、世に「ママゴン」の異名を持つ親等であった。

ここで、この「ママゴン」の子供が親になり「鬼ママ」なら、その子供達が、これから十年、十五年先に親になった時、その子供達にとっては、どのような母親像に映るのか、興味を感じられる。

さて我が栃木県青年神職むすび会も、発会より、早くも十五年の歳月が流れようとしている。この流れは、方丈記の一文にある如く、「行く川のながれは絶えずして、本の水にあらず、よどみにうかぶうたかたは、かつ消え、かつむすびて、久しくとどまる事なし、云々」とありますが、まさしく、この歩みは、水上に浮ぶ泡くでもあり、又或る時は、洪水の如く、自然界を破壊する様なはげしい勢いでもあり、静かな流れの中で畏怖感を与えた事もあったろう。この流れの源流を求めるならばこの発会当時の機関紙「むすび」の創刊号でこの会のこれからの歩むべき道標とも云うべき一文が揚げられている。要約するとその、第一に、自己研鑽は何故必要とされるか、第二に、会員相互の親睦は何故必要とされるか、この二つの目的を初代会長が会員に問うている。現在、十五年を迎えるに当って、我々栃木県青年神職むすび会の会員諸君は、この機会に、互いに自己を練磨し、斯道の興隆の為に大いなる意欲を持って欲しい。かつ又会員相互のコミニケーションをしっかりと持って載きたい。この移り変りの激しい社会に於いて、若い青年の力を結集せねば、到底神社界の発展は望めないことと思われます。



多賀大社
神青協中央研修会　46. 10. 5・6

流れ行く川の水は、常住不断の如くであっても、今流れる水そのものは、元の水ではない。

今ここで若い情熱を斯道の興隆の為に惜しみなく努力を傾けて載きたい。この折目が、栃木県青年神職むすび会の為に益々飛躍発展される礎にならんことを願うものである。

我ら青年神職

第四代会長　提　箸　克　之

青年時代は、人の一生の中でも特に人間形成の点に於いて最も大事な一時期である、と云うは論をまたないところである。

いついかなる時代や社会においても、その当時の青年達が若き情熱と使命感を傾注して組織づくりの機運を高揚することは、それなりの重要性や要因が存するからである。

過去、本県の神社界に於いて、現在第一線で活躍される先輩諸氏が、当時まだ、若手神職と云われた昭和二十二年頃に台頭したとのことを伺ったことがある。それは敗戦によって蒙った衝撃が、我が国全体を覆い国民生活は極度に混乱し、もとより神社界は神道指令によって後退を余儀なくされ、その結果は固有の思想や精神までが混迷して、前途に大いなる危惧と不安をもった異常なまでの世相の状勢から醸成したものに他ならないと想像される。

一方我が「むすび会」の設立についてはどうであろうか、前者と状況や趣きに相違があると云えるし、このことについては諸兄の判断に委ねたい。現実として十五年余の歳月を経過した今日、当時の動機を考えるならば、青年神職が同志としての結合を熱望していたことが中心的

な目標であったことを考えると誠に感慨新たなるものをおぼえる。

当時をふり返ってみると、本会が暗中模索の青年神職たちが、神社界との出合い或いは触れ合いの場でもあったり、大いに研讃を積み重ねる場でもあり、又、特に本会の舵取りをする諸兄は、何くれとなく諸般の実情に如何に対応していくのかなど、幾多の苦労があったと承知している。

このような状態から本会の活動も次第に軌道に乗り始め、特に神社庁の事業遂行の為に微力でも幾分かの協力ができたことは、本会として幅広い展開とより一層の飛躍に一歩前進したと

若き頃の筆者（右）

同時に、神社界が青年の為すべき活動の場を与えてくれたとも解釈することができよう。

次に中央の神青協との関連についても述べてみたい。本県の場合には本会の発会当初から「教化部青年部」として加入していたが、このことについては本会の性格や建前からすると一部矛盾したものと、少なからず誤解があったようだが、神社庁当局と会長（当時）とが諒解の上で小異をすて大同につくと云うような適切な措置として講じたものであったと考えられる。この件については最近の総会に於いて、本会の本来の在り方として、種々議論の末に、本会の正式名称をもって加入して、立場を明確にしたことは、時勢の推移とは云え、会員の新陳代謝を示すひとつの会自体の変革であると思う。

もう一つ想起される事柄がある。それは会員の年令の問題に関することである。斯界の青年層の年令適応の認識は、他の社会の全組織とはおおよそ比ではないが、それは止むを得ないことでもある。しかし乍ら、ある程度の年令の制限をもって、よりよい青年神職の会に発展向上させる為には、若き青年神職に門戸を開くようにしないと、ややもすると青年症動脈硬化的組織に陥らないとも限らないし、若い活潑な運営を配慮してのことであった。各県との連合会議などでも大いに本県の若さを強調したことが記憶されると共に、更に、今後若き神職が飛躍されることを切望したい。

意義ある十五年の歩みの上に立って、設立当初の意義と目標を一層認識されて、神社界の先兵としての期待感に失望を持たれることのないよう相互の理解と友情と協力との信念を確立して、青年らしい活動を推進することによって、「なるほど青年神職の活動である」と称讃されるよう努力しようではないか。「言うは易く、行うは難し」ではあるが、今迄の数々の貴重な体験は脈々とした結晶として、今後神社界の為に発揮されるものと信じる次第である。

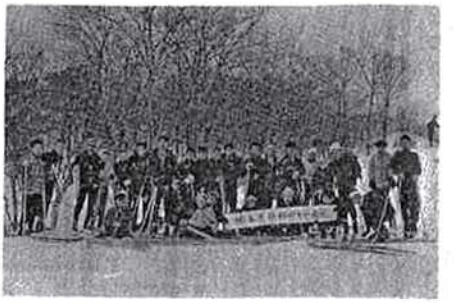
「青年は次代の担い手であり、活力の象徴である」とのことを銘記していかねばならない。

むすび会と共に

人見昇三

私が久しく故郷を離れ（修業の為、箱根神社に勤務していた）帰って来た翌年の昭和三十七年三月青年神職「むすび会」が旧神社庁の老朽庁舎に於いて誕生した。当時の石原庁長の深い御理解と援助のもとに神職界に良い意味での刺戟を与え青年神職相互の親睦を計る事を目的とし横瀬、今は亡き荒川両氏が中心となり「むすび会」が力強くスタートした訳であるが、創設に協力した山田、水谷、二橋等の諸氏は、今は他県に勤務してしまいなつかしい人となってしまった。

十年一昔と言われるがその言葉をかりるならば一昔半が過ぎ去った事になる。私もずい分年をとったものだ。当時（創設時）は二十六、七才の血気盛んな年頃で「むすび会」の会合の通知があるのが待ちどおしくて何もない山奥から字都宮に出て〝同業〟の若者達と一同に会し気兼なく談話出来るという事は、一つの楽しみであった。会合の後は、決まった様に行きつけの飲み屋へ二次会、三次会、はては終電車さえも忘れて飲み続け帰れなくなる事、度々、そんな訳だから随分先輩、友人、後輩達、或はその御家族の皆様には大変な御迷惑をお掛けいたし俗に言う若気のいたりとは申せ今更ながら申し訳なく恐縮いたしております。その中でも忘れられぬ思い出は、会合の後、いつものごとくした



たか飲み歩き例の如く終電に乗り遅れ横瀬先輩の車に乗せられデコボコ道を山奥へ数時間、着いた所は先輩のお社、真夜中しかもお腹の大きな奥さんを起こし二人で又飲み直し翌日は二日酔いでフラフラする頭をおさえながら早々に退散、と思いきや先輩の「山でも見て行かねェけ。」の一言に惑わされ桧の苗木の植樹の手伝いをさせてもらった。十二、三年も前の事ゆえ、桧も随分と大きくなった事だろうが大きなお腹の中の赤ちゃんは桧よりも、もっと〳〵成長され先輩も心強い事であろう。これは何日耳にした話ではあるが女子ばかり四人も続きその後やっと男子にめぐまれたとか。いやァ、先輩も頑張りました。

亡き荒川先輩の所へも二度程、泊めていただいた。先輩は芸達者で飲む程に酔う程にベッサメムチョの歌を身で表情たっぷりに歌い踊り、いつも我々、みんなを笑わせ座を和やかにさせてくれる雰囲気作りの名人であった。先輩の最後の会になってしまった「むすび会」の集まりに支部の新年会と重なり相にく私は出席する事が出来なかった事は何ともくやまれてならない。先輩が亡くなられた知らせを受けても何とも信じ難く又、万感胸に迫まるものがあった。むすび会だけでなく神職界にとってもおしい方を亡くしてしまい残念である。

昭和四十六年六月、神社庁設立二十五周年記念とむすび会十周年記念が重なりむすび会主催による慈善公演を催した。〝恵まれない子に愛の手を〟の名称のもとに時の会長吉田氏を中心に入場券の売りさばきをはじめ、全てに不慣れな仕事ながら会員一団となりこの大事業を大成功のうちに終らせる事が事も思い出に深いものがある。

一都七県野球大会の事、初めての唐沢ゴルフ等々……。青春時代を会と共に過ごし楽しい事が数多くあり思い出は尽きない。会が十五年たった今日でも創設当時の精神は立派に引き継がれ本県神社庁の一翼を担う程の成長を見た。現職の神社庁の教化部長を始め各役員、又各支部あるいは各神社の中すうは、「むすび会」の会員、OBでもある。

どうか「むすび会」が神社界の若い芽を育成する中心的な存在として今日、益々発展し有為な人材を輩出される様、心から祈念致して居ります。

（那須温泉神社宮司）

兼職の神主

黒崎健三

田舎の神社は幼稚園を経営する程の不動産が有る分けで無く、収入が有る分けで無く、どうしても「二足の草鞋を履く」様になってしまい、自然寺小屋の名残りであろうか、教える職業の先生が普通の様である。

私の父も嘗ては教鞭を執っており、たまに、地鎮祭や初宮詣等を依頼された場合、生活のポイントの先生の方が疎かになってしまい、有難迷惑の複雑な心境になったであろう事は想像に難くない。

私が大学受験の方針を定める年頃になってくると「二足の草鞋は難かしい、しかし、仙人でないのだから霞を食って生活出来ないし、と云っていつでもお祭りを依頼されたならば、速やかにお祭りの奉仕を出来る仕事をもたなくては」と云って居た事を今さらの如く思い出されます。

江戸時代は医者が無かったので、どうしても神社やお寺が中心になり、病気の治療を受けに近隣の人達が我が家に尋ねて来られたとの事で、今でも庭の片隅に、薬草が見られます。その様な話しを聞いて居た事もあって、医師か、薬剤師になろうと定めて居た事は事実です。

いざ薬大の願書を出す段階になって、父は薬学を卒業したならば、国学院の校風にあたる為、国学院の門を必ずくぐり、正門の所の神社をお詣りする事と、約束させられ、薬大卒業と同時

に夜間部第三学年に編入致しましたが、理科系から文科系への百八十度転換の学問には、全く閉口致しました。

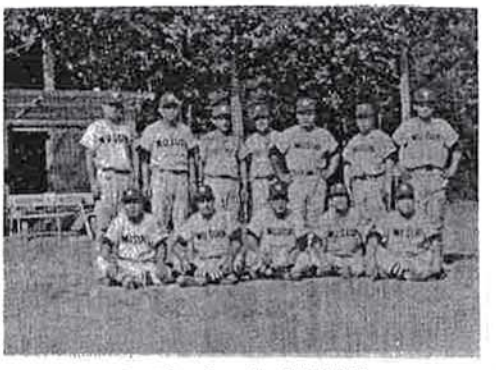
むすび会結成後の祝宴の席にて、横瀬会長と、亡き荒川さんとより「何故薬剤師になられたか」の二人からの質問を受けたのを今でもはっきり、思い出されます。

過日、あるお守り業者が尋ねて来た折、兼職を聞いて見たら「先生が普通で、幼稚園経営、料理屋・ソバ屋・旅館、珍らしい所で置屋などですが薬局も珍しいですね」と云って居りました。

兼職の職業の良し悪しは別にして、終日神社に居て、参詣人と親しくお話しが出来、神道昂揚に邁進出来れば良いし、それが理想である。それでも兼職のお蔭で生活が安定して来たので伊勢神宮・明治神宮の様に「御祈禱料はお気持で結構ですよ」と云えるのは宗教人にとって、最高の事ではなかろうか。もし、神職だけで生活に負われて居れば、地鎮祭はいくらですと、一般の事業の如く、値段をつける様になって、有難味が無くなってしまうであろうし、世間からはあそこの「ねぎさん」はまるもうけだと悪口云われるのがおちである。

要は兼職のお陰で、何時でも家におり出社出来る事が、氏子の方達にも知られて来たらしく又一つの例をとると、初詣の人達に暖炉も無く寒い拝殿の昇り口で、大麻を打ち振って参詣人達にサービスをしたりして居る結果も要因の一つになって居るだろうが、年々、社頭が賑やかになって参り、教化活動にも力を入れる事が出来る様になって来た事は、神様の御恵みと、報徳会に傾倒して居た亡き父の、良き未来への設計があったからに他ならない。

（八雲神社宮司）



野球大会（於茨城）

雑感

「兼務神社体制のこと」

金子宏一

全国に神社は約八万を数えますが、これに比べて神職は約一万八千名であります。

本県においては神社が約二千弱であり、神職が三百四十余名でありますから、これは神職一人当りにしますと六社のお社を受持つことになりますので、当然兼務奉仕の体制が生じて来るのであります。「ここで兼務とは本務に対する兼務であって、法的には本兼務の別はない」。

戦前は兼務神社の受持区域や社数の制限があったようでありますが、戦後はその制限も制度もなくなりました。従って兼務神社の受持については、大よそ、その地域の神職と氏子のつながりから各々の神社の責任役員の連署があれば宮司任命の具申は自由に出来るようになっています。このことは云い替えれば神職と役員の合意があれば一般の諸社は何処でも兼務することが出来ると云うことになります。

まずその一つに地理的奉仕体制を見た場合、例えば甲の神職と神社の距離が二キロとする。乙の神職とその神社の距離が十キロとする。この神社の奉仕神職は乙であり、しかも乙は甲の居住地を通り越して行くとすれば、これは客観的に見て不自然であります。このような実例は県内にいくつもある訳ですから、やはり見直し聞き直しをする必要があると考えます。

次は兼務社数のバランスの問題について考えますと、これ又多い人と少い人の差が歴然としており、多い人は三十余社、少ない人職は一～二社の人もある訳で、その地域の神職さんから時々苦言を聞くことがあります。その苦言の一つの理由に職分等で一時兼務しなければならない場合は別として、その職分が止んでも元に替らないでそのままになっていることが多いと云うのであります。勿論そこには何らかの理由なり原因がある訳ですが、意外とこのような問題が神職間のトラブルのもとになったり支部内の統制を乱す原因にもなったりすることがあります。常に不満のないバランスのとれた兼務体制を確立し、保持して行かないと、総合的に神社振興の実はあがって行かないし、神社界の発展

も望めないのであります。まだ他にいくつもの実例や私考もありますが、ここでは一つの問題提起として日頃考えていたことを記しました。

最後に、青年神職むすび会が十五歳になってこの記念する年を更に意義あらしめることは、常に神社界を広く深く眺めて、時勢に流されず一つ一つの足跡を残して行く事が大切であると思います。むすび会が更に発展することを期待します。

（今宮神社宮司）

大神神社

夜明け前の人

「竹内彌平次」

小林一成

我々神道人はとかく新しい時代を見る目に欠ける所がある。今日明日の日本を憂うる者は多いが、その目を遠く十年、いや百年先に据えて国造りを考え憂うる者は少ない。

我々宗教人は、常に新しい時代、又困難な時代を迎うる時に、国乱れた時の忠臣であらねばならない。新しい時代を迎えてから世に迎合して生きる事は容易である。しかしそれは我々の生き方ではない。

神道人たる者は、常に新しい日本の為の旗手であらねばならぬ。

吉田松陰は若くして此の世を去った。その門弟達も、新しい日本の為に散華していった。その中には多くの神道人もいた。

明治維新よりおよそ七十年前、世は諸大名に異国船取扱令、海岸防備令が出され、一方において塙保己一が和学講談所を設立し、本居宣長が古事記伝全巻を完成した寛政時代に浅草御蔵前に竹内彌平次という人がいた。

竹内氏は古文書によると「蓋シ竹内彌平次ハ累代周二施ス御蔵之事一」とある。竹内氏は累代江戸浅草御蔵御門内にあった谷之倉稲荷を信仰していたという。年に一度正月の十一日に太平山神社に来山していた。（当時太平山神社には学問所があり、子弟達が常に国学を講していた）寛政十一年正月竹内氏は、社前に於て剣を授けられ、その剣には稲荷大明神の五文字が刻まれていたという。竹内氏は江戸に帰り、御蔵門内の稲荷内に太平山稲荷を祀ったのである。しかし当時は神仏習合の時代であり、その力は仏教側に多くあった時代である。特に田沼意次が死んだとはいえ、まだ十年とたたない稲荷信仰の強い時に彼は突然として呻枳尼天を祀った社寺に宇迦之御魂神を合祀したのである。それからの竹内氏は天保八年までのおよそ四十七年間困難な時を過さねばならなかった。それは、当時に於ては破天荒な神仏を分離しようという行為の為であった。

この事件より七十年前（明治維新より百四十年前）太平山に於て一つの事件がおきた。社寺の間に争いが起り、それは幕府に訴するまでに発展し、神社側の神仏分離運動になってゆき、水戸浪士が当山に来山するまでのおよそ百二十年間続くのである。その拠点となったのが前述の浅草御蔵御門内鎮座の稲荷大明神であった。

享保十四年に羽倉摂津守より安鎮之証書を受け、寛政十二年には宇迦之御魂神を祀り、ついに天保八年五月竹内氏は、江戸幕府の台所の御蔵内に祀ってあった谷之倉稲荷の神仏分離に成功するのである。（この稲荷は現在も蔵前にある）この間およそ百年間、多くの神主や武士や庶民達が神仏分離の為に散っていったという。しかし、その人々は歴史上にその足跡すら残していない。わずかに竹内氏だけがその名を残しているが、明治維新より七十年前、一般庶民にとって新しい夜明けの光すら見ることのない時代に、新しい時代の神社神道のあるべき姿を見据えて活躍した竹内彌平次とはどのような人物であったのか、明確にその姿を見せない。

明治時代になって神仏は時の政府によって分離された。しかしその事実よりも、そうあらねばならぬと活躍し散っていった人々の心を我々は学ばねばならぬのではないか。あの幕末の旗手達の旗はいったいどこにあるのか。我々青年神職はまづその旗を索さねばならないのではないか。

（太平山神社禰宜）

民俗採訪レポート

「日光女馬方物語」

副会長　矢野忠弘

大正期の日光案内書を見ていると「日光名物女馬子」と題し、襷姿にあねさん被の女性が馬を引く木版画挿絵が目にとまる。英訳のタイトルも入り「ウーマンパック　ホース　ドライバー」。そして次の様に説明される。

『阪路一折すれば路傍渠水あり、奔激して来り、落ちて瀑泉となる。此處より眺望すれば、鳴虫山屑を拂ふで近く聳え、大谷川に沿ふて足尾方面より女馬子の数馬を卒み出で来るなど、真に畫中の観あり。』

名物として扱われた当時の女馬子を捜し、郷里日光市小来川を訪ねた。その一端をこゝに紹介させていたゞく。

女馬子は栃木県内でも日光、那須、等の県北に多いようである。女馬子、女馬方、女馬喰、等と呼ぶが、当地では「ダチンツケ」と呼び、別に女性のみではない。駄賃つけ、と解釈し、賃金を貰い荷を運ぶ意味で、「つけ」は謝礼の意も少なからず含まれると解釈してよかろう。荷は当地の主要生産品であった木炭で、炭問屋の要求により、日光迄運ぶ。時には二社一寺や旅館に直接運搬する。従って明確に解釈すれば、「炭の運搬を協定賃金により行のう職業」と言える。しかも、男は農閑期の仕事として、女は特別に家計を助ける目的でなく小遣い取りである。結婚した女が家に納まる慣習は無く、働くことが当然であった。裕福な家の嫁といっても皆同様に働いた。扨、実際の仕事はどうであったろう。

彼女達の出立ちは、木綿の股引き、ツッポバンテン（絆纏）、草鞋、頭にはキッカガサを被る。雨雪の時は蓑を着る。そんな姿で、冒頭に記した絵とはかなり異なる。丁度盆踊りの姿であるが、あんな格好では大きな炭俵の積み卸しや馬の世話はとてもとても、ということになる。時々一諸に日光見物かたがた同行する子供たちにそんな姿をさせた、と言うから、案内書に相応しい絵として子供がモデルになったとも考えられる。

櫃原神宮

次に、彼女たちの日課はどうであったろうか。炭の需要が秋から春にかけてであるから毎年十月下旬に始まり三月下旬迄で、一年で最も寒い季節に仕事は集中する。しかも、暮正月が入り農閑期とは言え主婦としては多忙な毎日でもある。平均して二十歳の頃に嫁いでいるが、この仕事を始めたのは、お姑さんの後を継いだ例が多い。早朝（午前四時頃）、食事、弁当の準備、馬の手入れ、飼葉の準備をして遅くとも七時には馬と共に家を出る。炭を貯蔵したニンバ（荷場）に集合する。男二人、女五人程度で構成され、男が世話役である。各自馬を一頭乃至は二頭引く。二頭あやつる女性は珍らしかった。お互に手伝い一頭宛二俵の炭をつむ。日光迄の山路は細く沢伝いに登る。峠で荷を積み直して下り道であるから馬の尻の方に積む。馬は手綱を引くのでなく後から追う格好でないと、人間の方が馬に追われることになり疲れるし馬も気がたって来る。炭問屋に到着、荷を渡し、賃金を受け取る。賃金は大正期で一貫目三銭程度、俵で十六貫及び十八貫の三種で、女性は普通十六貫目俵が多かった。二俵で一円八銭、馬二頭を引く女性で二円十六銭の収入となる。当時の山

仕事男手間が日当八十銭乃至一円と言われ、男達と同等或はそれ以上の収入であった。昼食を済ませ各々日光の町内で買物をする。主に食料の味噌、醤油、魚、或は食器類、夫子供の衣服等であった。しかしあくまで彼女達自身の小遣であったらしく中には自分のものばかり買ってしまう人もいたという。が大半は家の台所をあずかる女性として関係品の購入が多かった。子供達への土産と夫への酒は誰もが買ったというから、ほゝえましいかぎりである。終って一同帰路につく。家に帰ると馬を洗い飼葉を与えてから家にあがる。疲れたからと横になってしまうわけにはいかない。夕食の仕度、食事が終ると夜なべに草鞋造りが始まる。家族は各自使う草鞋は男女を問わず造った。他に馬用の丸い草鞋も造らねばならない。悪天候が続くと履き物の消耗も多い。家族誰れもが暇さえあれば必ず草鞋編みをしたという。従って来客があっても手仕事をしながら会話をすることは失礼にあたらない。客の方も心得ていて「仕事をしながらお相手をして失敬な」など言う者はそこの社会を知らぬ者と云うことになる。今の我々には理解し難いことである。

女馬方の発祥は明らかでないが、江戸後期の「御神領明細帳」によると当地の炭の生産は主要産業のトップにあげられている。日光社寺、日光今市地区旅籠での炭の需要は冬季ともなれば膨大であったことは容易に推測できる。当地のみならず日光周辺のどの山村からも出荷されたという。先づ天候に左右されず販売に応じ一定量を運搬してくれる彼女達の存在は業者にとって最適なものであった。彼女達の姿がなくなるのは昭和十年頃という。原因はトラックの出現であった。炭問屋自身がトラック輸送を始めた為である。社会面では兵役制度の確立、戦時統制法公布、という状勢に男たちが村を離れることが多く、家事、農作業は女性の手に負うことになっていった。

大きな馬を操り炭俵をあげ下しする女性の姿は、観光の外国人はもちろん都会の人々にとっても恰好の土産話しであったろう。白い雪道を淡々と行き交う情景は独特の美しさを醸し出し、真に「画中の観あり」であったろう。現代生活の如き仕事とレジャー等という意識は無く、朝から晩まで働くことが全てであった。「朝でも晩でも自分のわらじは自分で編んだから大変だったよ」という古老の言葉に、当時の生活の基本を知らされた気がする。家族全員、村人全員が働き、協力し、工夫し、生活する。寧ろ人々の悦びがその辺にあったのではなかろうか。「家のだんなは、まず酒が好きでね、帰りに文句を言いながら酒買いをしてね。でもうまそうに飲んでくれたよ。」笑いながら話す元女馬方の言葉にたくましく、反面優しい日本女性を見たような気がする。真のウーマンリブ発見であった。

（日光二荒山神社権禰宜）

変身「むすび会」

副会長　阿部　憶

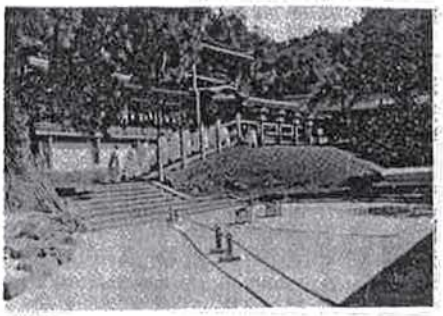
私は四十七年頃、稲葉前副会長に連られ「むすび会」に顔を出し始めた。残念ながらチャリティーショーも経験出来なかった。会創設当初のことは全く解らない。

扨て、御承知の通り、「むすび会」は三十七年神社庁部内に属さない全くフリーの立場で生まれ、運営されて来た。氏子青年会・敬神婦人会等とも異った神社庁の承認されない会として、県内の若手神職の研修・親睦団体でした。

神道青年全国協議会も本年三十周年を迎えますが、本県は「栃木県神社庁教化部青年会」と言う団体で加盟され永年「むすび会」が代行していた。特に近年神政連等も発足し、会も対外的活動が増し、立場運営の違いから何かと不合理が生じた。執行部も中央の協議会に副った事業を行うにも難しい。五十一年頃よりこの点について執行部・役員会などで再々に渡り協議をし、五十二年総会に於て創設当初の「むすび会」の性格と多少変更が生じるが今後更に神道界でより飛躍すべく決議を受け、先般正式に神社庁の承認を得て、神青協にも「栃木県青年神職むすび会」の名称で再登録をした。

しかるに、本年より会員を中心とした活動から今後は、神社庁・神青協等の対外的活動の強い組織としてスタートした。今日の社会情況は神道（神社）界にとって極めて厳しい中で我々会員は一致団結し、十五年の永い伝統と経験を生かし精一ぱい頑張ねばならないと思う。

（日光東照宮権禰宜）



春日大社
大和国古社めぐり

大木と盆栽

鈴木隆俊

昭和四十八年より「むすび会」が実施している事業に、神社の植林〃がある。今日植林した幼い一本の苗木も三百数十年経つと「日光杉並木街道」のような老樹大木の雄々しき偉観を呈するようになるのであるが、之らを考えると〃神社の植林〃は、神社と森、鎮守の森を考える上に於いて実に大きな意義があるといえる。

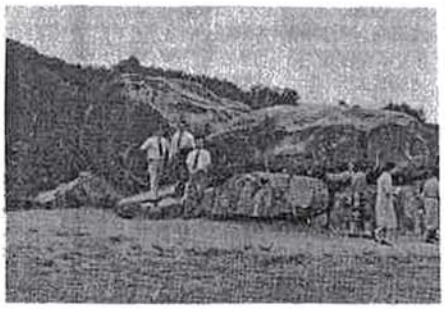
さて、人間を樹木にたとえて考えてみたい。人間は顔の形が異なるように、色々な性質や色々な生き方をしている。この世の中は色々な人がいるから楽しく、又意義がある。しかし、年々特色や個性ある人が少なくなってきているように思える。よく〃明治生まれはガンコだ！〃と耳にするが、それはある面で明治の世相を表現し、当時の人の気骨を表現しているもので結構なことだと思う。

現代の若者でガンコだ！と言われる人は少なく、すぐに妥協し、強い信念を養う気持ちが薄いようである。カッコはよいが、しかし弱々しい。明治の人は山の大木であり、今の人は庭の盆栽のように見える。盆栽は姿や形は美しいが、山の大木のように風雪に耐え自立することはできない。現代の社会機構、特に教育面に於いて大きな問題があり、このような弱々しい女性的男性が育ってくるのである。強いては大木になれず、所詮釜戸の「マキ」にしか使い途がなくなるのである。神州男児として生まれたからには生涯「マキ」で終りたくないものだ。

昔から〃高い木は風当りが強い〃と言われるが、風当りが強くて結構！そこに人間の存在価値があるのだ。先輩や上司に叱られたら、即！反省考慮の上前進しよう。我々は若いのだから人生の経験も仕事の経験も浅いのだ。先輩や上司だって憎らしくて叱ったり、怒っているのではあるまい。

幸いにして神社界に於いては、御立派な先輩が数多おり、その方々のよき御指導の下に、天にも昇る大木となるのが、我々に与えられた使命ではなかろうか。

（日光東照宮権禰宜）



石舞台

今、青年神職が置かれている現状は

柳田耕太

戦後三十年を経、高度経済成長の持たらした昭和元禄の余韻がわずかばかり残る昨今、世界烈強の国際社会の一翼を担い、一身に注目せられている日本丸の行先は何んとも予想がつかない状態のようです。

和魂漢才・和魂洋才と言われる様に、外来の文化学問を吸収しつつ発展成長して来た日本の歴史にあって、明治維新後の日本百年の歳月はまるで西洋文明・文化の謳歌といっても過言ではない。中でも戦後の社会風潮はアメリカナイズされつくしたかの様です。

特に青少年達は過去の日本の歴史と祖先の生き方を否定され、批判される中で、頼れるものは物質のみの生活環境で育って参りました。信念もなく、自信喪失の父母や仲間のなかで、何が真実なのかを求め彷徨しているのです。自らの経験の中で何一つ信じるものの無い状態で、自らを労る姿は何んと物悲しく、寂しい姿であります。

何を信じて生きて良いのかわからない孤独な生き物そのものであります。

この様な現代青年の一員であり、「神と人との中執持ち」の任務を受けている我々青年神職はいかようでしょうか。

地方の村部に生きる私達は現実に追われ、いつの間にか老人神主になっている自分の姿に不安を感じる次第であります。

戦後三十年を振り返って見ると、私達の父や祖父は敗戦の後マッカーサー神道指令の下に宗教、法人の一員として神社を維持運営して行くことに一抹の不安を感じつつ、何んとか氏子と氏神様の関係だけは、連がりだけは残してくれました。その甲斐あって各地では社殿の修覆等もされ、神社に対する敬神の啓蒙も除々に浸透して来た様です。ふるさと意識の高揚はここ数年来の日本の社会風潮でもあります。

ところで、私の所属する芳賀支部には現在二十八名の神職が居ります。そのなかで二十数年来第一線で実践活動をして来られたのは約半数の先輩達であります。しかも、六十歳以上の人達ばかりなのです。戦後の混乱期から神社神道の復興の先兵として神明奉仕に邁進されて来たのであります。かたや農業をしつつ、祖先から受け継いだ伝統文化の拠点である神社を維持することは最も困難な道であったと考えます。

大和国古社めぐり
直　会

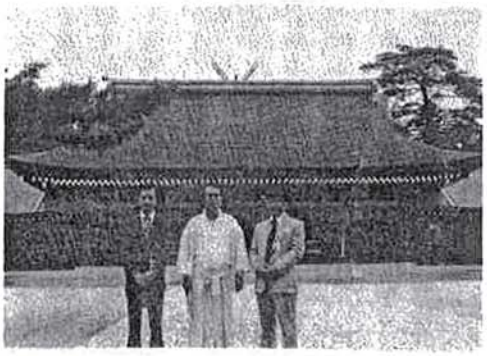
その先輩達が今健在であるにしろ、長くて十年の余裕しか私達に与えて来れません。

一般氏子からプロとしての若い専門の神職が求められている今、残りの神職がサラリーマン化し兼職している状態では、氏子からの要求に答えられないことは明白なのです。既に専従の神職のいない町街では弁財天や家相方位を占う祈禱師が神職同様、それ以上の活動をし、一般から除々に認められつつあるのが現実なのです。

今日ほど、若い神職後継者が要求されている時はないと言っても過言ではありません。そして、優秀でやる気のある人材は日本丸の精神的文化的支柱を育む神社神道界にとっては尚さら必要なのです。

ここに、県内の若手神職の仲間づくりの拠点である「むすび会」も十五年を経て、将来の十年二十年のために建設的な話し合いがなされ、実践活動に移れるような仲間づくりの場にしたいと考えて居ります。今や我々青年神職には前向きの行動しか許されません。今必要な事業は是非共、今完遂して行かねばならないのです。子孫のためにも。

（大前神社禰宜）



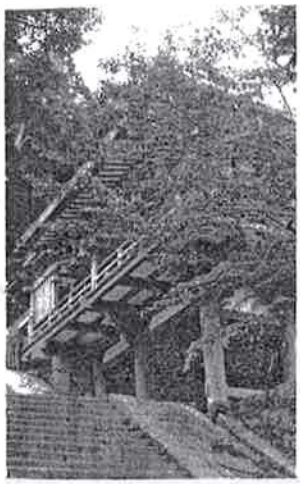
大和国古社めぐり　橿原神宮

むすび会創立十五周年を迎えて

下妻良夫

むすび会設立十五周年おめでとうございます。私は本会に入会して僅か四年でございますが、現在の本会が種々の活動ができるのもひとえに先輩諸氏の御尽力の賜物と思います。現在当会では数多の事業なり活動を行っていますが、ここに十五周年を迎え、更に研究・検討を重ね当会の存在を確認するいい機会であると思います。会員相互の親睦はもっとも大切なことです。がその親睦をさらに拡大して「自」から「他」へと働きかけるような積極性が生まれでてもいいのではないでしょうか。昨年神社庁所属の一団体として再出発した今日、我々青年神職の果たすべき責務、指命は増々大きなものとなります。めまぐるしく遷り変る現社会情勢の中、神社界のます〳〵の発展を期するためお互いに協力し合いより効果的活動が望まれます。社務の多忙化している今日ではありますが、各社諸先輩方の御理解・御支援をお願いするものでございます。

（今宮神社宮司）



談山神社
大和国古社めぐり

若人と神社参拝に思う

多田民男

私は現在、日光二荒山神社に奉仕しておりますが、特定な人々を除けば神社に来る人は多いが、参拝する人は非常に少なくただ観光のみになっております。

特に若人達は神社に来ても一般と異った建物だと見入り、此の神社は見るべき処が多いとか少ないと云った声が多く、宗教施設としての見方より観光施設としての見方が多いのであります。其のたびに昨今の若人は神社をどう思うか、又神社に来たらどうあるべきかを知らないのかと不思議になります。と同時に神観念の薄さに飽れます。服装態度にしても公園にでも来ているのと同じであり神前に頭を下げ、参拝する者は少なくなっております。

宇治平等院
大和国　古社めぐり

神社寺院でも一般の家庭でも同じですが、他人の家に行けば其れなりの行儀作法を用い家の方々に失礼のないように、又笑われないように気を配るのが世の常ですが、其の考えすら浮かばず奇声を発し遊ぶと云う事に現代教育偏見が見られます。観光地の神社である特殊条件も有りますが、観光地といえ神社に来たら神に祈り手を合わせる事が出来ない、祈りと感謝の感じない人間になって来た事に寂しさを覚えます。又其のような者に天皇制批判、赤ヘルをかぶり鉄棒を振い親兄弟を苦しめて世間を騒がすような問題を引き起こしかねない人間に変わる危険性が多いのであります。それは多種多様な事件記事が新聞紙上に見られることからも明らかで主体制の欠如すら見られます。

此れらは個人の問題かと申しますと社会的教育の変化により現代個人主義へ又利己主義へと発展したわけであります。一般的な事でもバス電車に乗り降りする時、老人を蔑ろにして我れ先にとかき分ける行動等、又車中に於いて老人が苦労して立っているのに若人が椅子に座り大声で話しをしている状は、戦前の人達からは、想像もする事も出来ないでありましょう。

教育の違いは有っても「礼節」を重んずる事の出来る人間性、余裕ある暖かい人間性を回復したいものであります。

現代の若い男が女みたいな長髪、此れ一つ取り上げても躾教育が変化するし、新憲法下の教育により日本人特有の人間性欠如が見られ何んとも寂しい限りです。

今後、神社を中心とした礼儀正しい規律ある日本人独特な心暖かい人間性回復を心から願いたいものであります。

（日光二荒山神社出仕）

神青協「沖縄祖国復帰五周年記念奉告祭並びに戦歿者慰霊祭」に参加して

越口正一

昨年五月九日より四泊五日の日程にて、奉仕団々長北川会長以下二十一名は、一日目小雨の降る那覇空港に到着した後、波之上宮に午後二時集合正式参拝した後、結団式に引続き神社庁庁長を交えて沖縄県の神社関係者と過去と現在の神社に対する住民の考えや足跡青年神職の現在の姿・行動・考えについて説明と懇談会を行ない神社庁に神道書籍寄贈目録を贈呈して会を閉じた。二日目は午前十時より護国神社にて当神社禰宜大野氏の斎主の基に厳粛に沖縄復帰五周年戦歿者慰霊祭を執り行ない、後バスにて南部戦跡を次々に巡拝し紺青の海の色とギラギラと照りつける丘黎明の塔の前にて慰霊のことばを述べ、団員全員にて「海ゆかば」を合唱その後は各自県人の塔を参拝し一路飛行機にて夕焼けの美しい石垣島に渡った。三日目は石垣港より豪華客船？第八新栄丸にて日本の最南端紺青色の海に浮かび出された「人口千人、周囲四キロ」の波照間島に到着した。団員は明日の記念奉告祭に備えて海辺に出て精進潔斎し夜は集会所にて地元の青年達と交歓会を行なった。翌日、午前十時より島の住民を始め婦人会、青年会、小学校全生徒参列の基に祖国復帰五周年記念奉告祭国旗掲揚塔の入魂式を副会長鈴木氏を斎主として厳粛に行ない国旗が淡いブルーの海の色を背景に高々と翻る掲揚塔を囲んで参列者全員にて復帰五周年の祝福と波照間島の繁栄を祈って万歳三唱を行ない奉告祭終了後は団員が持ちよった土産とサッカーボール、バレーボールそれに神青協が用意した離島の児童向け図書寄贈目録を贈呈しこれから毎年国旗を二枚贈ることを約束して午後二時紺青の南海と白く光る航跡を残し波照間島を後にして石垣島を経由して那覇空航に到着翌日現地にて解散した。

（大前神社権禰宜）

民主主義教育の副作用

武田勉

我が国は、終戦後占領軍により民主主義という「国家の主権は国民にあるとする思想に基ずき、政治の上で国民の意思を尊重する。」思想及教育を強いられた。戦前の一般に言われている軍権至上主義を全面的に否定して戦争を放棄した平和主義へと急変したのである。それまでは、神国思想、忠君愛国精神を唱えていた教育労働者は、八月十五日を限りに自身の教育理念を捨て暗中模索のうちに民主主義教育なるものを初めたのである。

さてこうした民主主義の教育が、今日の日本にどのようなる影響を及ぼしてきているかは衆知の通りである。利己主義を産み、権利の濫用を産み、社会的偽善の増加、低俗な文化の隆盛、健全なる思想の崩壊、精神力及体力の衰弱、そして国を愛するよりもパンを愛する国民を育てあげてきたのである。これらは全て民主主義教育の副作用であり、そうしたことが昨今の一連の出来事を生ぜしめているといっても過言ではないであろう。

北方国土返還問題、一世一元制の確立、防衛問題、君が代、国旗論争、紀元節問題、又巷での爆発事件、成田国際空港問題等、現在の国情、国民性を考慮すると起きるのが当然で、起こらないことの方が不自然と思われる。

家庭に於いても同様で、農業社会より産業社会に移行した現今、生産の単位より消費の単位に変ると共に、家庭に於いて行なわれていた躾教育ができなくなり、教育の全てが学校に、しいては教職員に委ねられるようになった。しかるにその学校での教育たるや、知識のつめ込みばかりで、人間教育の根幹をなすところの倫理道徳、所謂修身教育なるものを終戦と同時に捨て去ってしまっているので始末が悪い。そのような場で教育され育った人間が、「コトナ」（身体は大人で精神面は子供）となって一社会人として又将来の日本を担う中堅幹部として各自の仕事に従事しているのである。そうした境遇で成育したのであるからその弊害を避けられようは

ずがないのである。

私は、自身教育の重要性を考える上で、教育勅語の中にある、

父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信ジ
恭倹己レヲ持シ博愛衆ニ及ボシ

という言葉の重要性を思うのである。私は教育勅語を再び学校教育の中にくみこもうというのではない。その中に含まれている内容を、もう一度ふり返っていただきたいと思うからであり、その中にこそ今日の教育を是正する一指針があるような気がするのである。

（東照宮権禰宜）

千葉県神育との懇談

「不滅」

斎藤隆裕

人類は、何万年も前からこの地上に存在し、そして、人間は現実に強く、かつ一層良く生きようとした。そして、今までにいろいろな変化をとげてきたが、ただ一つ変わらない事は、人間がこの世界に誕生した限りは、いつかは死ぬということだ。

死とは、それまでの自分の全ての社会関係を断つものである意味では、自分の消滅である。ここに死に対する恐怖がある。

死後と言わなくても将来に期待し、不滅を追求し、永遠に生き、そして栄えようとする欲求がある。霊魂の存在を肯定するのもその一つであろう。

具体的にどういう形をもって現われるかは人それぞれによって異なるが、その根底には極めて似ており相通ずるものがある。古代人や原始人の考えからすると、死という考えは睡眠の状態とほとんど区別されない永遠の眠りとも考え睡眠中の夢や失神、あるいは仮死の状態からの連想によって霊魂なども信じ現世と違ったあの世の生活をすると考えた。

そのようにして人類は早い時代から霊魂の存在を認めて、自分の永存意識をもったのであろう。又、霊魂の存在を認めない人にとっても、死後の事、又、後々のことについてどのように考えているのか。ある人は、肉体の死亡と同時に全ての有機組織は分解され、自分自身の最後とみる。これは、そういう考えの人には必然的に生ずる帰結である。又、ある人は、細胞の遺伝をもって、自分の永生不滅を考え、ある人は、子孫が繁昌することに自分で安住し、そこに一種の不滅を意識する。以上のように、不滅という観念には、いろいろな形式がある。

人間には、神の存在ということよりも、神というような観念を生ずることに大きな興味がある。それと同様に不滅の観念も、霊魂又は、これに代わる物が永遠に存続して不滅であると考えるところにこれまた大きな興味があると思われる。ことに社会生活が発達するに従い、不滅の信仰にも精神的要素が濃くなってくる。

自分の死亡、すなわち自分の社会、あるいは世界の滅亡ということで、自分の意識現象しか真実として認められない人間にとって、それが虚無になるということは最も痛ましい事であろう。つまり、願望は信仰にまで進まなければ止まないのである。そういう願望を根拠として、ごく普通に現われたものは霊魂であり、人間の肉体は滅んでも霊魂によって、自分の永存に対する欲求が満たされる。自分の肉体そのものが、死という真実によって滅びても、自分そのものの滅亡と考える事ができないために生じてきた霊魂の観念は、不滅という考えの主である。

不滅観念に現われる精神的要素は、宗教においては、その根本をなすものであり、神の観念のうちでも重要な要素となる。そして、道徳の発達や哲学的思考が発達するに従い宗教思想も違ったものも出てくるのではなかろうか。

（安住神社禰宜）

『C・G・ユングの世界』

斎藤芳史

テーマは自由ということなので、ユングの心理学について少し書きたいと思う。

ユングはフロイトの精神分析学を、更に発展させた理論を樹立したと言われているが、その興味深い所は宗教との関連を見出したことであろう。マルクスなどの反宗教的唯物論に対し、ユングは宗教の側に立ち、個々の人間と人類全体に対する宗教の必要性を認めている。その背景には、父がプロテスタントの牧師であったという家庭環境もあるだろう。

「多くの神経症は心の宗教的諸要求が、子供じみた啓蒙思想の結果、もはや知覚されない点にまず基いている。」、と言って、ユングは宗教と人間性の深いつながりを示している。

即ち宗教的な根底のある明確な世界観を持った人間はそれだけ神経症にかかりにくく、その宗教の中に不安を克服する力を見出すということをユングは主張し、宗教は或る目的の為に人為的につくられたものではなく、「人間の心の自然的発露」なのだと見ている。

『東洋的瞑想の心理』(ユング著作集4)で、無意識界の解明のいわば実践として東洋的悟りをあげているが、悟りは、鈴木大拙が言うように「無意識的なものへの洞察」であり、それはとりも直さず人間の心性全部の開裂に他ならない。禅などのいう直観的認識は生命活動の全面にわたって働く情感に満ちた全体把握であり、それは我々が模索するアイデンティティーという問題にかかわってくるであろう。ユングの主張する所は、自己が自己である為の認識は無意識界の認識にあるということである。

ユングは人間の無意識の深層には、普遍的無意識と呼ばれる領域が存在するという。人間は無意識の深層に、自分自身の母親の像を超えた絶対的なやさしさを与えてくれる母なるものの・イメージ(一つの原形的イメージ)をもっており、それらは外界に投影され、各民族が持つ神話の女神や崇拝の対象となったいろいろな像として受けつがれ、それらが人類に共通のパターンをもつことにユングは注目し、母なるものの原形が人間の深層に存在すると考えた。しかしそれはあくまで人間の意識によって把握し得ない仮設的概念であり、これの意識内における働きを自我がイメージとして把えたものが原形的イメージなのである。ユングは「原形はそれ自身空で形態的であり、潜在的可能性にすぎない。それは先見的に与えられている表象可能性なのである。」という。この母なるものは、傷ついた人を癒すとか、ある人が仕事の成果をあげる為の支えとして存在するとか、そこにものごとを変化せしめる力をもっているというのである。

原形には「影」と呼ばれるものもある。「影はその主体が自分自身について認めることを拒否しているが、それでも直接または間接に自分の上に押しつけられてくるすべてのこと……たとえば、性格の劣等な傾向やその他の両立しがたい傾向……を人格化したものである。」と、ユングは言う。人はそれぞれ統合された人格として生きてくる時、必ず、その逆の人格が存在し、それが原形イメージの「影」なのである。

また、原形には「アニマ・アニムス」といわれるものがあるという。これは男性の中にある女性面(アニマ)、女性の中にある男性面(アニムス)のことだ。人間には外界に対して見せる自分がある。男性なら男らしさというような一般的属性をもった面(ペルソナ)があるわけだが、その無意識界に沈んだものがアニマである。男性であれ女性であれ、潜在的可能性としては両性具有的であるとユングは考えた。アニマは、感情、非合理的なものへの感受性、愛、無意識に対する開かれた関係などをもたらし、芸術家がその内に存在する「永遠の女性」を求めて努力するのも、そのアニマ像との関係にあるという。女性の場合は無意識内に男性的な面が集積されていて、そのアニムスはその人の生き方に強い影響を与えるという。これら男性・女性にある無意識内の面は、時に、子に対するやさしい父親、口うるさくきびしい母親というような、男女の対外的な面(ペルソナ)とは不似合な点を生じさせたりするようである。

すなわち、人間の心のなかには対極性が存在し、それらのあいだに相補的な関係が存在しているのである。ユングは人間を「外向型」、「内向型」の二つのタイプに大別し、さらにそれを「思考・感性・感覚・直観」に分け、人間のタイプを論じているが、この内向と外向いう考え方も心の相補性に沿うもので、たとえば、内向的な人と外向的な人がよい友人であったりし、またそういった相反する性格の男女が良い夫婦だったりすることは、意外に多いのではないだ

ろうか。」

ユングは、人間の意識は自我を中心としてある程度の統合性・安定性をもっているが、常にそれよりも高次の統合性へと志向する傾向が心の中に存在すると考えるのだ。意識が或る状態を保とうとする時、そこにヒステリー症状が起きるのは、意識とは逆の作用があるからで、意識・無意識を含む心全体の統合の中心としての「自己」の存在をユングは仮定するのである。ユングは「自己は心の全体性であり、また同時にその中心である。これは自我と一致するものでなく、大きい円が小さい円を含むように自我を包含する」と言っている。ユングの定義によれば、無意識内に存在していて、意識化することの不可能なものなのである。人間の自我は自己のはたらきを意識化することができるだけなのだ。ユングはこの自己というものの実現化を個性化と呼び、個人内の実現傾向と、その人に対する外界からの要請の中で、その人はまさにその人なりの、人となり、個性を形成してゆくのだと言う。ユングは無意識界にある自己の求明により、心の全体像を見出そうとしたのだ。それは、無時間的・空間的なものの洞察であり、恐ろしく無限的な思考と言える。そしてそれは、ユングを共時性という非因果的連関という問題の追求へと進ませた。この共時性という問題は、我々に偶然というものへの再思考を促す。

……たとえば、私は母方の祖母が死んだ時には東京にいたのだが、その死を私は確かに夢の中で知った。そして、私は父の代わりに、葬儀に行くことになった。……棺に花を投込む時になって誰れかが「おばあさんは花が大好きだったね」と言った。……私はこの場面、言葉を夢で見たのだった。

これなど、私は「意味ある偶然の一致」と見たい。こういった因果律によっては解明できないものを見ようとするのが共時性の問題なのである。

私はユングの言うように無意識界こそ人間性の源であり、それの認識こそが大切なことだと思う。そして、自らの体験と認識が我々の真の人間性を見出すことなのだろう。

（追記）ユング心理学のわけのわからぬ断片的要約のごときものになってしまったが、私の注目する所は、無意識界に存在する人間を決定づける暗闇の中にある力ともいうべきものである。

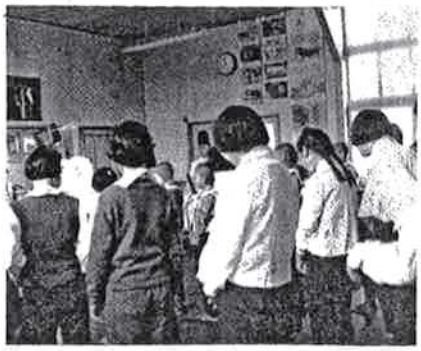
（日光二荒山神社出仕）

千葉県神道青年会を迎えて
昭52．9．21

青年の道 ― 二十年への提言

太陽は東方より昇り、天地自然の四面を遍く照す。
年を迎え、春を呼び、青雲の中に奔馬は走る。
戊午の駿馬は南中を指し、赤き血潮が五体を廻りひたすら走る。
明日に向かって青春を言祝ぐ。
坂東の里下毛野に歴然と聳える二千の御社。
清き流れにあらわれて遙か伊勢を拝み、清明正直のまことの道は永遠の緑色に続く。
祖先の歩める惟神の道は今日を育み、明日の子孫の未来を照す。
百名の勇者が逸散に目ざす時の流れと広い荒野に。
つかれた国民の心と五体を清める祓のことば。
気中に広がる第六感の祈りは青春を呼び起し、
望を照す神の道へと。
青年の道は森の中に、真直に続く緑色の道なり。

稲　葉　久　雄（日光東照宮権禰宜）



とちの実学園神榊祭　毎年5月21日

大和国古社めぐりの旅

崇神天皇御陵にて　昭52．9．10

編集後記

今度の創立十五周年記念特集号の原稿を御依頼申し上げましたところ、額賀庁長を始め皆様方より心こもる御寄稿を賜り、厚くお礼申し上げます。

本会の十五周年を祝うに当り、私達会員は二十周年に向けて新たに努力精進し神明奉仕に邁進する所存であります。

小生が学生時代「祝ふ」ということについて友と語り合った事を思い出しました。「―祝賀会」とか「―祝」ということばが日常多く使われて居りますが「祝ふ」という本意はいったいどうなのかと――ややもするとめでたいことやその人の過去の功績についてたたえるという意味の方が強くとられているのではないかと。

本来はもっと将来に対する前向きのものなのではないか。これから将来を嘱望すること、幸福になるようにと強く念願し、御祝をすることではないかと話し合ったものです。

その様な意味も含めて、今後のむすび会に対して先輩諸兄のお言葉の意に反することなく、私達は青年神職として一致団結し、希望と気力と実行力のあるさわやかな青年神職になることを心掛けたいと思います。

最後に先輩諸兄と会員の皆様方の益々の弥栄を御祈念致します。

（柳田）